

アンデレ便り

明石聖マリア・マグダレン教会会館・牧師館新築へ

7月19日(日)は明石聖マリア・マグダレン教会巡錫の日です。心配された天気ですが、何とか雨が避けられそうです。王子公園側の主教館から車で約30分かけて教会に到着しました。道路から教会にいたる短い坂をあがり右手を見ますと、何十年もこの教会の牧師一家の住まいとして使用されてきた建物の姿はありませんでした。

1957年から5年間、牧師の父と母、父の母、子ども9名、総員12名が押し合いへし合いしながら暮らしていた、思い出の建物です。当時、どのような配置で私たち兄弟が寝ていたかの記憶は定かではありませんが、戦争ごっこや、枕やふとんの投げ合いですり切れ、毛羽立った畳の部屋で雑魚寝状態の毎日でした。兄弟喧嘩が絶えず、度を過ぎますと、いつの間にか父親が横に立っており、鉄拳制裁と相成ります。それだけでは赦してくれません。庭の植物の肥料として、トイレの肥を桶に入れて運ぶという苦行が待ちかまえております。桶に棒を通して兄が前、私が後ろから担ぐのですが、歩調を合わせることがまことに難しいのです。少しでもこれが乱れますと、桶の糞尿が一瞬にして波立ち、それが桶の縁を越えて私の足にかかるのです。

兄弟喧嘩を繰り返すうちに、父親がやってくる頃合いがわかるようになります。父が近づいて来る前に休戦し、一目散に外に飛び出し、牧師館と道路の間にあった大きな櫻の木の上に登り、下から見上げる父親の怒りが収まり、その場を去るまでそこに留まっておりました。

午前10時半からの聖餐式後ただちに建築予定地に集合、全員敷地の回りをまわり、土地を清めて、無事に工事を終えることができるよう、祈りました。

まもなく、建築献金のお願いが皆さまのお手元に届くことでしょう。

聖ペテロ教会宣教百年式典

明石訪問の翌日(7月20日)は神戸聖ペテロ教会宣教100年の記念聖餐式、祝賀会に出席しました。ご承知のように、この教会は、ミカエル教会の信徒で、葺合地区に住んでおられた方々のキリスト教宣教への熱意により、ミカエル教会から分封された教会です。ミカエル教会はいわば、神戸地域宣教の拠点であり、昇天教会、ヨハネ教会は同じようなかたちでミカエル教会から巣立っていきました。約130年前、ミカエル教会や乾行義塾、松蔭女学校など、ミッションスクールに派遣された宣教師や邦人教役者が様々なかたちで新しい宣教拠点や教会建設の為に尽力された結果です。

約50名のペテロ教会受聖餐者が1年以上も前から準備を整え、その一つとして宣教100年記念誌「磐～御国の鍵～」が発行されました。ペテロ教会の変遷を簡潔かつ明快に理解することができます。記念誌発行や礼拝、ホテルでの祝賀会実現のための熱意と実行力には参加しておりました多くの信徒にとって励ましとなったのではないかと思います。

宣教検討委員会開催

6月27日（土）主教諮問機関である宣教検討委員会第一回の会議が開催されました。今回はこの会議の背景について教区の皆さまに説明いたします。

献金の減少

高齢化の波は教会にもひたひたと押し寄せてきており、近年、教区内各教会を名実ともに支えて来られた多くの信徒が天に召され、各教会の財政状態が悪化しております。教区内全教会の普通献金を例にとりますと、2007年度は前年度比、345万円減少、2008年度の場合、約300万円減少、2004年度と2008年度を比較しますと、4年間で実に、約1000万円も減少しているのです。

地方の疲弊

一方、地方の教会で、日曜学校から中学生、高校生時代を送ってきた若者の多くは大学や職場を求めて都会に巣立ちます。その地方都市ですが、中心部の多くは閑散としております。かつては「銀座街」「金座街」などと呼ばれ、買い物客で賑わった商店街のシャッターの半数以上は閉められたままで、今では「シャッター通り」と呼ばれる有様です。量販店が郊外に安い敷地を求めた結果も原因の一つです。消費が次第に落ち込んでいる状態では、地方都市で若い人たちが職を得ること至難の業です。従って大都市で生活することになりますが、様々な要因が重なって都会の教会に根付く確立が少ないのも頭が痛い話です。

地方に関しては、政府が主体となり、地方活性化の方策を打ち出さない限り、状態は悪化の一途を辿ることが予想されます。これは日本だけではなく、多かれ少なかれ先進国全てに当てはまる現象であり、昨年開催のランベス会議でも議題として取り上げられました。

真の自律目指して

日本聖公会は1930年のランベス会議で自律（オートノマス）教会として認められ、1941年を期して日本聖公会は経済的独立を宣言しました。しかし、連合軍の爆撃により多くの教会が消失するなか終戦を迎えました。1956年、英米の聖公会は日本を視察、日本聖公会の自治・自給を決して犯さない様にし、戦後復興のための援助を開始しました。これも1977年をもって打ち切りとなり、日本聖公会は名実ともに自律に向けて進まざるを得ない状態に置かれたのです。神戸教区も同様です。

現在、信徒の方々の献金だけで教会・教区の財政を賄ってきたという、30年来続いた神戸教区の財政基盤が揺らぐのではないかという状況に直面しております。

統計を無視するわけにはいきませんが、それに振り回されてはなりません。冷徹な数字を真摯に受け止める姿勢と共に、それを通して教会の弱さがどこに存在するのか、それを見極めなければならないのです。5000人を養う奇跡で、イエスはピリポに「この人たちを食べさせるには、どこでパンを買えばよいのだろうか」と言ったとき、ピリポは「200デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と、人間のレベルだけの模範解答を提出しました。イエスはその時に5000人の人たちのために献げられた5つのパンと2匹の魚で全ての人たちを養われました。同じ奇跡が今の教区に求められているのです。